コロナ患者を「送る側」と「受ける側」の羅生門的現実

～オートエスノグラフィーと看護師長 M-GTA の対話から～

Rashomon-like Realities of “Sending” and “Receiving” COVID-19 Patients

増尾 佳苗

MASUO Kanae

（立命館大学大学院人間科学研究科）

(Graduate School of Human Sciences, Ritsumeikan University)

Key words: 羅生門的現実, エンパワメント, COVID-19

目的

コロナ禍（COVID-19）の災害現場では、同一の出来事が立場によって相反する現実として立ち現れる「羅生門的現実」が生じた。本発表は、コロナ患者を病院へ「送る側」の入院調整の経験（オートエスノグラフィー：AE）と、「受ける側」のコロナ病棟を管理した看護師長の語り（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ：M-GTA）という方法論の異なる二つの研究を対話させ、各立場から見えたもの・見えなかったもの、異なる現実の関係を示し、危機によって既存の前提が揺らいだとき、どのような条件で新たな協働と相互的なエンパワメントが生まれるのかを検討する。

方法

研究 1（送る側・AE）：看護師長・災害コーディネーターである筆者が、2020～2023 年の第一波から第八波にかけ、県の入院調整コントロールセンター・宿泊療養施設・病院の三つの場を往還した経験を、日記・活動記録から記述した。批判的実在論（CR）を枠組みとし、生権力・脆弱性・羅生門的現実を視座に解釈した。

研究 2（受ける側・M-GTA）：1 か月交代の混成チームで軽症コロナ病棟を管理した、災害救援者研修修了の看護師長 7 名に半構成面接（各 60 分、2024 年 12 月～2025 年 2 月）を行い、M-GTA で分析した。

対話：両研究の知見を、CR を援用した羅生門的現実の対比枠組みで、①各立場から見えたもの・見えなかったもの、②異なる現実の関係（断絶・接続）、③前提が揺らいだ際に協働や相互的エンパワメントが生じた条件の 3 観点から検討した。両研究とも所属施設の倫理審査の承認を得た。

結果

【送る側（AE）】数字と効率で病床を割り当てる場では、精神疾患・外国籍・高齢などの人々が管理の困難さを理由に断られる「ことわれる災害」が生じ、送る側の焦燥、受ける側の負担、看る側の恐怖という相いれない倫理が併存した。一方、電話越しの息づかいなど個別の「声」に応答し、立場を超えて互いの脆弱性を認め強みを出し合う（知の融合）なかで、コレクティブ・エンパワメントが生成され、そのプロセスは「前提の崩壊→倫理的葛藤→出会いによる自己の再定義→実践の再構成」の循環と定義された。

【受ける側（M-GTA）】14 概念・6 カテゴリーが生成された。同じコロナ病棟が「生存の恐怖と責務の場」「災害未経験の負い目を突きつける試練の場」「しがらみや忖度のない協働の場」「視野が広がる場」と多様に語られた。看護師長は【怖さを抱えたまま混成チームを率い】つつ、【わからないことも情報もそのまま開き】、【「できること」を出し合う】土壌をつくった。さらに【患者を看る事だけに集中】し【しがらみや忖度がなくなる】なかでスタッフの力に気づき、統率型から【強みに目を向け、一緒に作る】見守る管理へ転じ、相互に力づけ合っていた。

考察

両研究の対話は、同じパンデミックが異なる現実として現れただけでなく、各立場の見えるものと見えないものが非対称であったことを示した。送る側には「数字と断り」のなかで孤立する人々の声が、受ける側には「患者を看ること」とスタッフの力が見えた一方、前者には病棟での恐怖や協働が、後者には断られた人々の姿が見えにくかった。二つの現実は独立ではなく、送る側の苦渋の判断が受ける側の負担や恐怖を生むなど、互いに影響し合っていた。この落差は、効率優先の管理構造や、過保護な管理・年次の格付け・セクショナリズムといった平時の前提の揺らぎを可視化した。前提が揺らいだ場で協働と相互的なエンパワメントが生まれた条件は、援助者自身の脆弱性やわからなさの開示、目的の単一化によるしがらみの解消、個別の声への応答と場の往還であった。他方、個人の力量や偶然の出会いへの依存が課題として残る。羅生門的現実は排除すべきノイズではなく場のあいだを問い直す資源であり、各場の倫理の落差を平時から共有し対話させる仕組みこそが、次の感染症災害の連携の基盤となる。

限界：本対話は二研究の再読による解釈で、いずれも看護管理者の視点に限られた単一地域・施設の回顧的語りであり、断られた当事者や他職種の視点を含まない。

参考文献

宮前ら(2022)実践としてのチームエスノグラフィー.質的心理学研究 21:73-90

木下(2022)批判的実在論とは何か.看護研究 55(2):129-165

土元ら(2025)オートエスノグラフィー・マッピング. 新曜社